

平成 21 年 5 月 18 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720010
 研究課題名 (和文) 『老子』の注釈史及び受容史を中心とした中国学術史及び思想史の研究
 研究課題名 (英文) A Chinese history of thought and liberal arts: Focusing on hermeneutics and acceptance of Laozi (老子)
 研究代表者
 齋藤 智寛 (SAITO Tomohiro)
 東北大学・大学院文学研究科・准教授
 研究者番号：10400201

研究成果の概要：伝・顔師古撰『玄言新記明老部』について、その作者問題と『老子』注釈史上の位置づけについて一定の見通しを得た。特に、科段説と章指についての見解から、『明老部』が六朝より唐初の老学史について、貴重な情報を提供する資料であることを確かめた。『明老部』によれば、齊・梁以来、『老子』注釈書は儒仏二教同様に科段を採用したが、該書はそれに反対しつつ、章序の意義を説く章指は温存する、過渡的性格を持つ注釈書である。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,400,000	0	1,400,000
2007 年度	1,000,000	0	1,000,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	300,000	3,700,000

研究分野：中国哲学

科研費の分科・細目：哲学・中国哲学

キーワード：思想史、仏教学、中国哲学、宗教学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、「王弼の見た『老子』」(『中国の思想世界』イズミヤ出版、2006)において、『四庫提要』以来の諸先学の説を再検討しながら、王弼所注本『老子』の体裁を考察した。その結果、上下篇の篇序、81章の分章と章序などが、王弼本においてすでに現行本と同じ体裁を備えていたことを確認しえた。が、章数や章序に意味を見出し、あるいは見出さない注釈態度がいかなる意味を持っているのか、その点の考察が課題として残った。そこで代表者は本研究を計画し、文献学的議論にとどまった旧稿を思想史研究として継続発展させ、また対象となる時代も両漢魏晉

から隋唐にまで拡大することとしたのである。

2. 研究の目的

(1) 『老子』の本文研究と注釈研究の統一をはかる。本文における分章の有無や章数、『老子』で言えば上下篇の分離の有無や、「道経」「徳経」という篇題の有無などを、単なる書物の体裁の問題にとどめず、注釈者の思想との連関の上に理解する。

(2) 古典解読の方法論という視点から、儒仏道三教交渉をかんがえる。たとえば『老子』注釈における科段の存在や、章序に特別な意味を見出す思考は、儒教や仏教の経典解釈学

からの影響であるが、本研究はそれにとどまらず、二教から学んだ解釈法が道家・道教思想の文脈ではいかなる意義を持ち得たのかを考察する。

3. 研究の方法

(1) 顔師古撰と伝えられる『玄言新記明老部』について、写本の形体および内容の両面にわたって考察をくわえた。内容の検討にあたっては、旧稿「王弼が見た『老子』」の問題意識を継承発展させ、分章、章序へのまなざしと、科段説への態度について、『老子』解釈史上における意義を探求した。

(2) 中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館、国家図書館(以上、臺灣)、大英図書館、フランス国家図書館などの所蔵機関におもむき、敦煌文献の実見調査をおこなった。現地では、曾冠雄、劉淑芬、楊峻峰、Graham Hutt、Nathalie Monnetの各氏らと情報交換をおこなうことができた。

(3) 2008年度からは、申請者の所属研究機関である東北大学において、孟安排『道教義枢』の読書会を組織し、中国思想のみならず、中国文学や比較文化史学の教員、院生、学生の参加も得て、精確な訳注の作成をおこなった。当該年度は序文、道德義、法身義の前半まで会読を終えたが、「道」「徳」二概念の解釈や、法身説を通した老子観について、六朝唐初の『老子』解釈を伝えると思われる諸説の断片を回収することができた。これらは、王弼注から玄宗注にいたる老子注釈史の史料の空白を埋める貴重な材料である。

4. 研究成果

(1) 本研究の成果は、「伯希和 2462《玄言新記明老部》初探——《老子》的義疏學」において集中的に叙述されている。

敦煌文書ペリオ 2462号に筆写された『玄言新記明老部』(存五卷)は、顔師古(581—645)注と自称する『老子』注釈書の一つである。本作は成玄英『老子開題序訣義疏』や、李榮『道德真經注』など唐初の『老子』諸注釈書と共通の思想を持ち、南北朝より唐初に至る『老子』解釈史の欠をおぎなう貴重な資料とおもわれる。本研究では、思想のみならず『老子』本文や注釈の形式に着目して『明老部』を考察する。

(2) P. 2462は、a. 葛玄『道德經序訣』残文、b. 『太極隱訣』、c. 『玄言新記明老部』の三部分から構成される。料紙には界線が引かれた上、楷書で書かれており、全体に校勘がほどこされる。しかし、23箇所校勘にもかかわらず、ほかに13箇所の誤字を見落としており、さらに校勘してなお誤っている箇所も何箇所もある。これは、『明老部』の流

伝がすくなく、ペリオ本の筆写者は不完全で誤字の多いテキストしか入手できなかったことを暗示しよう。また、『道德經序訣』に関しては校勘を経て誤字はすべて解消している。このことも、本写本の誤字が筆写者の能力よりは底本の条件に左右されたことの證左であろう。『道德經序訣』はテキストが安定しており善本の入手が可能であったが、『明老部』はそうではなかったのである。

(3) 本写本では、『太極隱訣』も「顔監注」と記されるから、ペリオ本のごとき3作品の連写は規範化されており、もとは『太極隱訣』にもいわゆる顔師古注が付されていたと推測しうる。『明老部』は、王弼注にもとづく義疏なのだが、それとこれら2作品との連写が習慣化していたことは、王弼注の受容史において注目すべき事柄である。というのも、『道德經序訣』は通常、「五千文」系と呼ばれる『老子』テキストや、『河上公注』に附されているからである。王弼注は、陸徳明や司馬貞などからは、玄学の立場からする注釈とみなされており、神話的な老子像を描く『道德經序訣』との連写は、唐代にあってはやや特殊な王注評価なのである。

(4) 『明老部』の撰者としては、顔師古の名が写本に記されている。かれが編纂に参加した『五經正義』では、時おり『老子』を引用しているから、顔師古に『老子』注があってもおかしくはない。しかし、新旧両『唐書』の本伝には『明老部』撰述の事実がみえず、『漢書注』における『老子』理解と、『明老部』の解釈法とはかなり風格を異にしている。したがって本研究では、本書は太宗末期から武周期にかけて、ある士大夫が顔師古に仮託して作成した『老子』注であると結論した。成玄英や李榮との類似からは道士の作とも考えられるが、儒者である顔師古に偽託していること、開題で引用する「河上公序」なる文が、日本伝来抄本の「序」に一致していることから、士大夫作の可能性が高いとおもわれる。この「序」は、古勝隆一「賈大隱の『老子述義』」(『中国中古の学術』研文出版、2006)によって、おもに儒者の間で流通していたと推測されているのである。ただ、道教と関係の深い『道德經序訣』や『太極隱訣』と連写される理由が、問題として残る。

(5) 『明老部』は、『老子』全体の開題と、各章の序次、章指のみを記し、『老子』本文や逐句注は収録しない。武内義雄『老子原始』や『老子の研究』は、ペリオ本は巻頭の目録であると推測したが、本研究では、P. 2462は各章から章指のみを摘録した節略本であると結論した。本写本の筆者形式は、各巻の冒頭に選者名を記すなど、目録らしくはない。

また、内容を見ても『老子』全体に関わる内容や、他所の参照を求める章指の存在なども、解題目録とはおもえないのである。

(6)『明老部』は、晋宋以前の『老子』注は科段を設けていなかったが、斉梁以後に科段をつけて穿鑿する風潮がはじまったとして、より簡明な解釈を提唱している。これは、『老子』解釈史についての重要な情報であろう。同時代とおもわれる成玄英『老子義疏』では科段を採用しており、『明老部』にしたがえば、『老子義疏』は斉梁以来の『老子』注釈法を固守していたのである。

科段をしりぞけた『明老部』だが、毎章の章指では前章との関係についての解釈を述べ、81章を切れ目なく連環させている。この章序を強調した章指の文体は、『論語義疏』のような六朝義疏学を受け継ぎ、成玄英『老子義疏』にも共通している(表1参照)。

表1、章指体例対照表

書名	本文	位置
《論語義疏》	《為政》者，明人君為風俗政之法也……所以次前者，《學記》云……是明先學後乃可為政化民。故以為政次於《學而》也。	《為政第二》題下疏
《玄言新記明老部》	第二天下皆知章，所以次道者，前既明常道之體，此即明合道之人。	第 87-88 行
《老子道德經義疏》	此章所以次前者，前章明有無二觀，粗妙不同，故次此章，即顯無為之能、有為之弊。	《道德真經玄德纂疏》天下皆知章第二疏所引
《御製道德真經疏》	前章明妙本生死，入兩觀之不同。此章明樸散異因，萬殊而逐境，逐境則流浪，善化則歸根……	天下皆知章第二

八十一章という章数や、章次に意味を見出す思考は、『老子』という書物を宇宙の法則を反映し、隅々まで老子の意図がつかぬかれた聖典とみなす思考である。これは、南北朝から唐に至る老子神化の傾向と並行する現

象として理解できる。

こうした科段と章指への態度からは、六朝以来の『老子』注釈の伝統に対して、あるいは解放を求め、あるいは継承を企図する、『明老部』の過渡的性格がうかがえるのである(表2参照)。

表2、科段、章指の有無

書名	科段	章指
《玄言新記明老部》	無	有
成玄英《老子義疏》	有	有
李榮《道德真經注》	無	無
玄宗《御注道德真經》	無	無
玄宗《御製道德真經疏》	無	有

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- ①齋藤智寛、悟れなかった人々—禅律双修者の祈りと救い—、『東方学報』京都、第82冊、pp.69-117、2008、査読有
- ②齋藤智寛、伯希和2462《玄言新記明老部》初探——《老子》的義疏學、『敦煌学』第27号、pp.381-395、2008、査読無
- ③齋藤智寛、『梵網經』と密教—S2272V「金剛界心印儀」の翻刻紹介にちなんで、『敦煌写本研究年報』第2号、pp.23-46、2008、査読無
- ④齋藤智寛、中央研究院歴史語言研究所傅斯年図書館蔵「敦煌文献」漢文部分叙録補、『敦煌写本研究年報』創刊号、pp.27-52、2007、査読無

[学会発表](計2件)

- ①齋藤智寛、無臺明鏡照心地—《六祖壇經》的偈頌及其心性論、仏教文献与文学国際学術研討会、2008年10月24、25日(臺灣高雄仏光山国際会議庁)
- ②齋藤智寛、伯希和2462《玄言新記明老部》初探——《老子》的義疏學、2006 漢学研究

国際学術研究会、2006年10月26、27日(雲林科技大学漢学資料整理研究所)

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

齋藤 智寛 (SAITO Tomohiro)

東北大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号: 10400201

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: